

平成 21 年 6 月 9 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520334

研究課題名（和文） 訓読語詞の比較研究

研究課題名（英文） Comparative Studies on Heterograms in the World

研究代表者

春田 晴郎（HARUTA SEIRO）

東海大学・文学部・教授

研究者番号：90266354

研究成果の概要：

漢字文化圏、楔形文字文化圏、アラム文字文化圏およびその他の文化圏のどのような言語において訓読語詞を用いる訓読み表記が行なわれていたか明らかにし、またこのような様々な訓読み表記をどのような点から分類できるかその基準を示した。表音文字で書かれたアラム語詞を訓読みする中期イラン諸語の例を見ればわかるように、訓読みは決して日本語表記に特有ではなく、文字表記の全歴史を通じてみればかなり広く存在した現象であることが確認できる。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	800,000	0	800,000
2007 年度	900,000	270,000	1,170,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	420,000	2,620,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：訓読み、アラム文字、楔形文字、漢字

1. 研究開始当初の背景

本研究課題を着想するにいたった経緯と背景は以下の通りである。

研究代表者の本来の専門は、紀元前 3 世紀半ばから紀元後 2 世紀前半にかけて西アジアに存在したアルシャク朝パルティアの歴史研究およびこの王朝の主要言語であるパルティア語研究である。パルティアの都の一つであるニサー（トルクメニスタン）から出土した前 1 世紀の陶片文書の研究を進めていく中で、このアラム語訓読語詞に満ち満ちたパルティア語文書が、すでにパルティア語であるという十分な論拠が提出されている

にもかかわらず、その訓読みを認めずアラム語で書かれているとする主張がなされている（この主張は当然都合の悪い材料に目をつぶっており成立する余地は本来ない）ことに気がついた。同様なことは、イラン西部クルディスターンのアウロマンで発見された後 1 世紀の羊皮紙文書の表記言語を巡る言説にも見られた。

「訓読み表記」がどれほど普遍的なものであるか、ということに慣れていない欧米のアラム語研究者の一部（優れた研究者はアラム語説は採っていない）やこれに影響された一部のイラン研究者が、明らかに無理な主張を

しているのである。これに対して、正しいパルティア語表記史を研究者に広く認識してもらうには、パルティア語や他の中期イラン語における訓読み表記について述べるだけでなく、楔形文字文化圏や漢字文化圏も含めて総括的に訓読み表記を扱い、それがごく当り前の表記法であることを知ってもらわなければならないだろう、と考えるにいたった。

他方、日本においては、日本語の訓読み表記については多大な関心が払われており、優れた成果も陸続と挙がってきている。また、近年の資料増加と相まって、東アジア漢字文化圏における訓読み表記についても研究が急速に進展しつつある。しかし、日本語研究者で、楔形文字やアラム文字の訓読み語詞にまで目を向けている者はほとんどおらず、またそれを試みようとしても、十分な研究案内が存在しないことがわかった。

このような研究状況の中で、世界の諸言語表記における様々な訓読み表記を具体例を示しながら総覧していくことが、まず何よりも重要であると考え、本研究課題を申請するにいたったのである。

2. 研究の目的

楔形文字文化圏、漢字文化圏、アラム文字文化圏（中期イラン諸言語のいくつか）などに見られる「訓読み」表記について、総覧する。そして、日本語の研究者（とくに日本人）に対しては、訓読み表記の多様性について具体的に認識してもらえるような成果を出す。日本語以外の訓読み語詞表記を用いる諸言語を研究している者に対しても、まったく同様であるが、その上に日本語表記における訓読みについても理解してもらえるような成果を欧文で出す。これらの成果は同時に、一般的な文字表記研究の中で、訓読みを正当に扱えるだけの材料を与えるものである。さらに、可能な範囲で、基礎的な用語の統一が考慮されるよう、試案を提出する。

3. 研究の方法

訓読み表記を用いる各言語文字について、研究文献の収集、必要に応じての史料の収集することが、本研究課題を遂行する基本方法である。ただし、能力的に扱うすべての言語について原史料にあたって検討することはできないので、二次文献のみの収集に留まったものも、東アジアの諸言語を中心に存在する。

日本語については各時代・各種類（行政文書・文学等）の研究文献に満遍なく注意を払い研究状況を把握するようにした。

朝鮮半島の諸言語文字については、研究動向をまず把握し、ついで基礎的な文献の収集

に努めた。

その他、漢字文化圏の字喃、壮文字、水文字、白文字、女書、契丹文字、女真文字、ウイグル文中の漢語訓読み語詞、などについては、二次研究文献をピックアップした。

碑文パルティア語、碑文中期ペルシア語、ソグド語、アラム文字ホラズム語に関しては、史料および研究文献を収集した。あわせて、母字であるアラム語史料（とくにハハーマニシュ朝ペルシア時代からセレウコス朝時代にかけて）も文献収集を行なった。

アッカド語、エブラ語、ヒッタイト語（その他楔形文字を用いるアナトリアの言語も含めて）、フッリ語、ウラルトゥ語、エラム語などについては、史料および研究文献の収集をできる限り行なった。

その他、アイルランド語中でのラテン語訓読み語詞（仮借含む）などについても、従来の訓読み研究においてまったく言及がないので、いくつかの二次研究文献を収集した。

以上のような資料収集をもとに、研究の目的で挙げた総覧的な成果を発表していくこととなる。この際に、世界の訓読み諸表記をまとめて比較する視点が必要となるが、以下の2点に留意した。

まず、1点目は訓読みされる文字種（母字 mother script とここでは呼ぶ）ごとに分類することである。すなわち、主要な訓読み表記で言えば、「漢字」を訓読みする表記、「楔形文字（シュメール文字・アッカド文字）」を訓読みする表記、そして「アラム文字」を訓読みする表記、をその母字（漢字、楔形文字、アラム文字）によって分類する。

もうひとつの留意点は、各種訓読み表記について、比較分析する基準（criteria）を定めていくことである（この基準については「4. 研究の成果」参照）。

4. 研究成果

(1) まず、第1の成果は、訓読みがどれくらい言語表記においてみられるものであるか確認したことである。

以下のような諸言語の表記において、多かれ少なかれ訓読みが行なわれている。

①母字が漢字

漢語内でも訓読みに対応するものが一部見られるが、それに加えて、白文字、ゴバ文字、水文字、哈尼族の訓読み、カム族の訓読み、壮文字、女書、チュー・ノム、契丹文字、女真文字、ウイグル語における漢字訓読み（ウイグル文字というまったく別系統の文字で書かれた文中に訓読みされるべき漢字で書かれた語が記される）、朝鮮半島の訓読み（釈読口訣史料等）、日本語に訓読みが見られる。ただし、漢字文化圏南部や東北部における訓読みの中には、チュー・ノムのよう

に、新種の文字を創出する際の造字法の原理の一つとして訓読みが用いられているだけのものが少なくない。

②母字が楔形文字（シュメール文字・アッカド文字）

アッカド語およびエブラ語、ヒッタイト語、エラム語、ウラルトゥ語において訓読み表記が一般的に使われている。このうち、アッカド語の表記は、シュメール文字の音読み、訓読み、借音、借訓を用いる点で、日本語の万葉集等の表記にきわめて近い。シュメール語訓読語詞はルウィ語楔形文字表記やハッティ語においても用いられているが、これら2言語の表記はヒッタイト語表記と強い関係があるので独自の言語表記としては論じにくい。ただし、同じくヒッタイト語表記と強く結び付くパラ語表記においては訓読語詞はほとんど用いられない。また、フッリ語においても、訓読語詞は皆無ではないがきわめて用例は少ない。なお、アマルナ文書中のカナアン発書簡に多く見られる言語についても、（シュメール語詞を含む）アッカド語詞を文訓読していたのではないかという主張が出されて議論的になっている。

ヒッタイト語およびごく限定的な用例であるがウラルトゥ語表記においては、表音表記されているアッカド語詞を訓読みしている例がある。ヒッタイト語中のアッカド語詞には読まれない黙字になっているものも見られる。

③母字がアラム文字

アラム文字から派生したパルティア文字、中期ペルシア文字、ソグド文字、ホラズム文字、を用いるそれぞれの対応する中期イラン諸言語（パルティア語等）において、訓読みが行なわれていた。その他現在のグルジアやアルメニアにおいて訓読みの可能性のあるいくつかの史料が知られている（前2世紀～後2世紀）。アラム文字は表音文字（子音アルファベット）であるが、アラム語詞をそれぞれの言語で訓じているのであり、訓読み表記が文字表記上特殊な表記法でないことがここからも窺える。

④その他

母字がラテン文字の場合は、主に略号略記について一部訓読みが行なわれている。英語の”e. g.”などを例に挙げることができる。この略記略号訓読みが最も発達したのは、アイルランド語写本においてであって、借訓の例さえある。

幕末・明治期の日本においては、主として教育用途であったが、蘭文・英文の文訓読が行なわれていた。

その他、象形文字間での借用に、訓読みの原理が使われていると推定される例が東アジアやメソアメリカの諸文字について存在する。なお、現在のアラビア文字やラテン文

字の元になった原シナイ文字・原カナアン文字も、古代エジプト文字を訓読みしてその頭音を採ったものと考えられている。

戯書や聖典等での読み替え、マンガ等での複線的なルビ、さらには数字などは訓読みの境界内外として位置づけられる。

インド系の文字やアラビア文字で記される諸言語では、訓読語詞は報告されていないようである。

(2)このような多種多様な世界の訓読み表記について、暫定的ながらも分析する基準(criteria)を示したことは、本研究課題の第2の、そして最大の成果である。以下に各基準とその代表例を示す。

①訓読みされる母字が表意表語文字（楔形文字・漢字）か表音文字（アラム文字、ヒッタイト語中のアッカド語詞）か。また表意表語文字の場合は、母字の言語（シュメール語や漢語）の表記において表音補辞（送りかな）を使用する（シュメール文字）か使用しない（漢字）か。

②訓読みする言語と母字の言語との関係はどう変化したか。母字の言語が存続し続け周辺の訓読みを採用した諸言語に影響を与え続けた（漢語）か、母字の言語が話し言葉としては死滅したり（シュメール語）、訓読みを採用した諸言語との関係が薄れたり（アラム語）したか。また訓読み表記された固有名詞を母字の言語でどう読むか。「源義満」は漢語ではそのまま漢字音で（音読み相当）読まれていたようだが、訓読み表記を用いたアッカド人名はシュメール語テキストにおいても（逆向きの）訓読みされていたと推定されている。

③訓読み表記は、新たな文字セットを創出する際の造字法の一つ（チュー・ノム、契丹文字など）なのか、母字の文字セットを（基本的には）そのまま用いるか（日本語、アッカド語、パルティア語など）。また、自言語用の文字セット（ひらがなカタカナなど）と母字の文字セットを混用する（漢字仮名交じり文、ウイグル語における漢字訓読み）か母字の文字セットのみを用いる（万葉集などの表記、楔形文字使用各言語、アラム文字使用各言語）か。

④訓読みに3言語以上が関わるか否か。ヒッタイト語の訓読語詞の中には、《[シュメール語詞]+アッカド語表音補辞]+ヒッタイト語表音補辞、という二階建てのものが存在する。古代の日本語で「百濟」を「くだら」と読むのも、おそらく朝鮮半島の言語で訓読みされた語を、日本語でそのまま音読みして導入したものと思われる。

⑤訓読語詞の母字部分に関して、（とくに母字が表音表記される場合で）母字の言語が屈折語や膠着語のとき、その変化形が訓読語詞の母字部分に反映されている（ヒッタイト

語アッカド語詞)か、それとも母字部分の一つの形に固定されている(中期イラン語でのアラム語詞)か。

⑥訓読語詞(あるいは音読語詞も含めた非表音表記語詞)を弁別する符号や書法が存在する(宣命体小字など)か否か。

⑦訓読みと音読みが併存するか否か、また併存するならどのように併存しているか。一つの訓読語詞に別の音読みが存在する(日本語、アッカド語)か否か(中期イラン語のアラム語詞)。一字多訓あるいは同訓異字が(多く)存在する(日本語、アッカド語)か否か。訓読語詞が黙字になる場合がある(ヒッタイト語アッカド語詞)か否か。借訓がある(日本語、アッカド語)か否(ごく一部の例外を除いてパルティア語アラム語詞)か。

⑧文中での訓読語詞の比率が、非常に多いか、多いか、少ないか、ほとんどないか。これは一つの言語でも時代によって大きく異なる場合がある。全体的な傾向として、書記法がある程度安定してくると、極端に多いあるいは少ない表記は、中庸に向かうようであり、決して「多い」→「少ない」という一方向の変化ではない。

⑨品詞などにより、訓読語詞の使用頻度等が異なるか。たとえば、日本語やアッカド語では固有名詞に訓読語詞を用いるのは一般的であるが、パルティア語では文全体としてはアラム語詞の比率がきわめて高いにもかかわらず固有名詞にはアラム語訓読語詞は(まれな例外を除いて)用いられない。また、日本語では機能語に訓読語詞が用いられる例は「者／は」を除くとさほど頻繁ではないが、中期イラン諸語では、機能語とくに多くの前置詞は、他のアラム語訓読語詞の比率が低くなっているにもかかわらず、アラム語詞で記されている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

1. 春田晴郎、世界の訓読み表記、東海大学紀要文学部、査読無、86、2007、19-43.

[学会発表] (計2件)

1. HARUTA Seiro, Heterographic Writing Systems in Parthian and in Other Languages, in: 6th European Conference of Iranian Studies, 18-22 September, Vienna.

2. 春田晴郎、世界の訓読み表記の中でのパルティア語訓読み表記、第57回羽田記念館定例講演会、2006年11月25日、京都.

[図書] (計1件)

1. 春田晴郎、私家版、訓読語詞の比較研究(科学研究費補助金研究成果資料)、2009年、64頁.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

春田 晴郎 (HARUTA SEIRO)

東海大学・文学部・教授

研究者番号：90266354

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし